



私のライフワーク

2006年11月大田区内の高校性が文化祭で配布した「興安荏原郷開拓団の最期」というパンフレットを目にしてから、私は東京から中国東北部（満洲）の地に渡った開拓団のことを調査、研究している。このパンフレットを手にした時の衝撃は忘れられない。「開拓団は貧しい農民の人たちが行ったんじゃないの?」「なぜ都会の商店街の人たちが行ったの?」この疑問を解決すべく区内の市民運動をしていた仲間たちと「東京の満蒙開拓団を知る会」を結成して調査を始めた。

大田区にもあった

「満蒙開拓団のための訓練所」を追って

調査を始めると言っても、ほとんど資料が残っていない中で、東京都の公文書館や東京都図書館、国会図書館などを手当たり次第に探し回り、関係者に話を伺うなど小さなピースを貼り合わせていくジグソーパズルのような作業だった。大田区に訓練所があったらしいということはわかっていたが、それがどこにあるのかわからなかった。

ところが、それは何回も私が目にしていた地図の中にあっただのだ。戸籍住民課にいる時、古い地番の場所を確認するために見ていた大田区教育委員会発行の「大田区の文化財第26集 地図で見る大田区3」にある現在の多摩川清掃工場付近にしっかりと「多摩川農民訓練所」と書かれていた! 「見ているのに見えない」という言葉があるが、何だろうという問題意識をもって見ていなければ、単に文字を見ているだけで文字の持つ意味まで読み取っていない。知れば知るほどわかっていく様々なことに私は、夢中になり土日や休暇を使って仲間たちと調査・研究を行った。

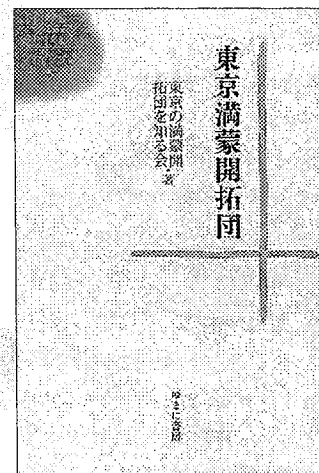
研究の成果は2012年9月に、ゆまに書房から「東京満蒙開拓団」として出版した。

出版してからも集めた資料を「資料集成」として緑蔭書房から出す予定である。また、この研究の内容について話をする機会にも恵まれ、大田区職労女性部や職員九条の会、市民団体や高校や大学などに呼ばれていくことが年に数回ある。歴史の事実と向き合うことは、同じ過ちを繰り返さないために、現在と未来を進むためにぜひとも必要なことだと考えている。

とりわけ過去の日本の侵略の歴史を知っていくことは大切なことだ。これは国際理解の第一歩なのだと思う。そうした考えから、最近では市川誠元総評議長が始めた「日中労働者交流協会」の後継組織「日中労働者情報フォーラム」として訪中することも多くなってきた。

市川誠氏の「日本と中国が再び戦火を交えることを労働者人民の力で阻止しよう」という「日中不再戦」の誓を引き継いでいくことも新たなライフワークとなった。

こうしたライフワークを持てたことは、私の今までのそしてこれからの人生にとって最大の成果だと感じている。



地域力推進課 藤村妙子

次回は、蒲田生活福祉課の安藤達也さんをお願いします。